

これまでの専門部会における主な意見等について

○…第１回部会意見 ●…他部会の委員・専門部会に属さない委員からの意見

◇…第２回部会意見

目指す姿１ 秋田の将来を支える高い志にあふれる人材の育成

- DXハイスクール・ラボラトリー事業に大きな予算が付いている。これがうまくいくと、教育のリニューアルが非常に進むと期待している。(廣田委員)
- 学校が大学や企業の協力を得る際、現在は、先生の個人的なツテに頼る場合が多い印象を受ける。県内にどのような人材がいて、どのような学習活動を展開できるかが分かるリストのようなものがあると、先生方の助けになると思う。(廣田委員)
- 学生は、インターンシップ先を就職先として強く意識する傾向にある。県で情報を一本化し、学生生徒と企業とを結び付ける場を作ってはどうか。(荒木委員)
- 理系への女性進学に対する対策を検討してほしい。(廣田委員)
- 科学の甲子園など、色々なことにチャレンジする女子生徒も増えてきているが、まだまだ偏見や固定観念を取り除いていく必要があるので、啓発的な活動も大事である。(佐藤部会長)
- 子どもの頃に経験する田植え作業などの原体験は、生産者への感謝と米のありがたみなどを学ぶきっかけになると思う。(農林水産部会：佐々木委員)
- 特に子どもや女性に対して、林業の体験学習等の機会を増やすなど次代を担う人材の確保・育成の対策が必要と考える。(農林水産部会：齊藤委員)
- 一次産業の働きがいや良いところを感じてもらえるようなイベントや教育、子どもたちへの体験学習が必要と考える。(農林水産部会：齊藤委員)
- 県内在住で観光業への就職を希望する若い世代はどの程度いて、その方々が何をきっかけに観光業に興味を持つのか気になっている。人と触れ合うことが好きな方が観光業に就けるよう、幼少期からの人材育成を進めていければ良い。(観光・交流部会：黒川委員)
- 女子高生向けの将来のキャリアなどについて考えるワークショップなど、未来を担う女性たちに対する教育に取り組むべきではないか。(未来創造・地域社会部会：石田委員)
- 子どもの学びと保護者の休暇を組み合わせた「ラーケーション」について、土曜日や日曜日が休みではない業態における人材確保にとっても効果があることから、秋田県でも取り組んでいただきたい。(観光・交流部会)
- 高校生が将来を見通した上で主体的なキャリア選択を行っていくためには、自己理解を深めることが大切である。(企画部会)
- ◇ 学校では、地域を見直すプログラムや地域を見つめる、その地域に対して何ができるかを考えるようなカリキュラムが組まれており、非常に良いと感じた。(高橋委員)
- ◇ 「秋田の将来を支える高い志を」という表現からは、「県内の大学に入り、県内に就

職することを期待されている」と受け取られる恐れがある。秋田の素晴らしさに触れた上で、今後、日本も含め、世界の中でどのように自分を生かしていきたいかを考える人材育成の仕方に変える必要がある。(高橋委員)

◇ 秋田出身ということがブランドマークになることが大切である。「秋田から未来にはばたく人材の育成」等に変更してはどうか。(佐藤部会長)

◇ 今は、どの業種も人手不足で取り合いの状況にある。早い段階から様々な職業について考える機会を増やしていく必要があるか、検討してはどうか。(廣田委員)

◇ どの分野でも優秀な人材が必要であり、優秀な人は医者になるといったような固定観念から脱却していかなければならない。女性についても、同様の固定観念を育てるような土壌があると思われるので、それを打破できるようなことをやっていく必要がある。(廣田委員)

◇ 我々大人も様々な職業を体験することで、やりがいや楽しみを見つけることのできる場合もある。子どもだけに期待するのではなく、幅広く声かけしていくべきである。(佐藤部会長)

◇ 高校生の離職率について、離職理由は人間関係が大きいと聞く。学校側では相当な努力をされていると思うが、企業側にも更なる努力をお願いしたい。(佐藤部会長)

目指す姿2 確かな学力の育成

○ 少子化は、問題ではなく、現象の一つとして捉えた上で議論していく必要がある。(高橋委員)

○ 30人程度学級編成は、先生が目が一人ひとりの児童生徒に行き届き、不登校の防止にもつながる効果的な取組である。(高橋委員)

○ 予算の関係もあるが、例えば、小学校低学年のうちは、1学級の人数を減らすなど、柔軟性をもったクラス編成ができれば、より先生が働きやすい環境にもなるし、子どもにとっても良い環境になると思う。ぜひ秋田らしい学級編成を考えていただきたい。(高橋委員)

○ 児童生徒1人1台端末について、家庭で安心して使用できるよう、どのようなソフトウェアを使っている、どのようなセキュリティ対策が行われているかなど、積極的に情報発信すべきである。(荒木委員)

○ 秋田は、地域との距離が近い教育を行っているので、こうした環境を生かし、休み時間に地域の人たちが子どもたちを見守るなど、PTAだけではなく、もっと幅広く、地域全体で子どもたちを見守りながら、教員の休み時間を確保し、働き方改革を進めてはどうか。(荒木委員)

○ 高校で、給食や学食を提供する、学生寮を整備する、交通アクセスをシームレスにするなど、周辺環境を整えることにより、地域が育ち、全体として教育が充実していくと思う。(高橋委員)

○ 不登校対策としてのICT活用(リモートでの授業参加)は、学校が遠い生徒や冬場雪の影響で登校が難しい生徒も利用できるのではないかと。リモートでの年間授業回数など文科省からの規定もあるかと思うが、県全体での取組が難しければ、モデル校において行い、学校側・家庭からの意見を聴き、検証・調査を行うことも必要ではな

いか。(荒木委員)

- ◇ 全国学力・学習状況調査の数学の結果を分析すると、自ら問題を発見し、解決するような思考力を必要とする問題について、秋田県は全国平均を下回っている。(佐藤部会長)
- ◇ 全国学力・学習状況調査の結果は、全国的に平均化しており、差が無くなってきている。これからは、いかに中位層や上位層を伸ばしていくのかが課題であり、新たな探究型授業を展開していく必要がある。(佐藤部会長)
- ◇ 秋田に限らず、日本の算数・数学の授業は、基本的に、展開の途中で児童生徒が話し合いを行うものの、最後は、収束して演習に入る習得型授業である。問題の解決方法や新たに見出した概念・性質について、数量や図形等を変更した問題に取り組んで一般化を図る、条件や場面を変えて発展的に考えるなど、更に問題解決に当たっていくことが望ましい。ゴールフリーで出来るかがポイントである。(佐藤部会長)
- ◇ 複線型の授業は、教師の側からすると、理念的には賛同できるが、実践できるのかという懸念がある。学びの個別化に挑戦していく必要があり、県教育委員会の支援をお願いしたい。(佐藤部会長)
- ◇ 大学は、探究授業であり、小・中・高校は、もう少し大学に寄っていく形でも良いのではないかと。ゴールフリーで構わないし、結論を出さなくても構わない。探究の楽しさを味わうことが最も大事なことで、探究授業の目的がどこにあるのかをいうことを再考しながら、授業を展開するのがよい。(高橋委員)
- ◇ 解決方法や結果がどうなるのか、子どもも先生も考えてみる。先生が答えを見いだせないということと言ってもよい。分からないことがあるということをお教えることも大切である。(佐藤部会長)
- ◇ 「分からない」ということを認識することが大事である。分からないところが分かると、分かるところとの区別ができ、分かるところがどこまで分かっているのかを整理すると、批判的思考や論文作成能力が育ち、伸びる子どもたちがたくさん出てくると思う。(高橋委員)
- ◇ 現在の探究型授業は、これまでやってきた授業に探究を少し付け足した程度にしか見えない。本当に探究学習が重要ということであれば、探究を中心に据えて、これまでの教育のやり方を全て見直し、再構築していく必要があるのではないかと。(廣田委員)
- ◇ 学力については、以前は知識が重視されていたが、現在は、思考力や学びに向かう姿勢も問われる時代になってきている。早く新しい形に変わっていく必要があるのではないかと。(廣田委員)
- ◇ 大学が探究できるのはお金があるからである。高校の先生が探究で何かやりたいといっても、現状ではすんなりお金が出ないように感じる。探究学習を進めていくのであれば、予算措置も必要になってくるのではないかと。(廣田委員)

目指す姿3 グローバル社会で活躍できる人材の育成

- ◇ 五城目町では、JICA海外協力隊のグローバルプログラム（派遣前型）の受入を行っており、これにより、小・中学生が海外に興味を持ち始め、修学旅行の際に自主的にJICA東北を訪問するなど、グローバル社会で活躍する意識が育ってきている。

JICAに限らず、技能実習生や外国人のネットワークなど、国際的な活動を行っている機関との連携を図りながら、地域に根ざした、グローバル社会で活躍するための人材育成プログラムを広く展開していけばよいのではないか。(高橋委員)

- ◇ 県立高校における海外の高校との交流について、特定の学校での実施に止まっている。オンラインを活用しながら、全ての高校で交流を実施し、中学校・高校という早い段階で、世界に触れる・世界を知るという刺激を得てほしい。(佐藤部会長)
- ◇ グローバル人材を育成する以前に、全ての生徒に最低限必要な英語力を身に付けさせることがまずは大事であり、それを達成するための計画を練る必要があるのではないか。(廣田委員)
- ◇ グローバルな分野で頑張りたいと思う児童生徒が好きだけ取り組めるようなメニューを用意すべきである。(廣田委員)
- ◇ グローバル社会で活躍するためには、まずは国語力を身に付けることが基本であることから、しっかりと取り組む必要がある。

目指す姿4 豊かな心と健やかな体の育成

- コロナが収束し、オンライン授業が全く行われなくなってしまったが、タブレット等を使って、不登校で学校に行けない子どもたちがオンラインで授業に参加できる仕組みを採れないか。(荒木委員)
- 不登校の子どもがいる保護者と学校の間でコミュニケーションがうまくいかない事例をよく聞く。現在は、「希望すれば」カウンセラーにつなぐというスタンスであるが、学校・カウンセラー・保護者の三者面談を初期段階で行い、その後2週間又は1ヶ月単位で定期的に三者面談を行うことをシステム化してはどうか。(荒木委員)
- 学校がある時間帯に不登校の子どもや保護者に、図書館や美術館・博物館など、地域の施設の一角を開放し、「居場所」を提供してはどうか。(荒木委員)
- 教育留学制度を活用し、いじめや不登校で悩んでいる子どもが、校長裁量で転校できる仕組みを構築できないか。(荒木委員)
- 学びの多様化学校を設置する自治体が増えてきているので、秋田県においても、今後検討する必要があるのではないか。(廣田委員)
- 学びの多様化学校を設置するにしても、秋田県は面積が広く、冬場は送り迎えが困難であることから、オンラインで授業に参加できるシステムを採り入れてはどうか。(荒木委員)
- 調査結果によると、子どもの体力が落ちているので、公園など、体を動かして遊んで、体力を付けることのできる場所を提供してあげたい。(廣田委員)
- 部活動の地域移行について、関係者への説明不足を感じる。進めるに当たっては、もう少し細かな配慮が必要である。(観光・交流部会：守屋委員)
- 健康寿命の延伸の取組で、子ども健康会議を企画しているが、子どもから、大人・親に対する健康づくりに関する意見は有効であると思われるし、子どものうちから健康を考えることは必要である。(健康・医療・福祉部会：石場委員)
- ◇ 不登校は悪いことではなく、普通のことである。誰だって学校に行きたくない日があるので、そういった子も平等にサポートを受けられる仕組みがあればよい。(廣田委

員)

- ◇ 新型コロナウイルス感染症が5類感染症になったが、元に戻るのではなく、オンラインを上手に使いながら取り組むことを、全県的に広げていくべきである。(佐藤部会長)

目指す姿5 地域社会の活性化と産業振興に資する高等教育機関の機能の強化

- 「高校生の県内進学推進事業」について、オンデマンドで配信してはどうか。(廣田委員)
- 当該家庭で初めて大学に進学する子ども（ファーストジェネレーション）は、家族の理解や協力を得にくいケースがある。賞与型の奨学金などの支援があっても良いのではないか。(荒木委員)
- 大学に進学することの実際や意義が、広く理解されることが重要である。(佐藤部会長)
- 県北・県南に、大学等の高等教育機関が足を向け、対面でも空気を感じていただくことが必要である。(佐藤部会長)
- 奨学金の情報をまとめたポータルサイトがあるとよい。県で予算をかけなくとも、当該情報をプリントアウトして、中学校や高校に配るという方法もある。(高橋委員)
- 現在、大学授業料の値上げについて奨学金とセットで議論されており、中間層の学生の負担増が危惧されている。何らかのフォローアップを考えていく必要がある。クラウドファンディングも含め、色々な方法で資金を集めることも考えられる。(佐藤部会長)
- ◇ 社会人になってから必要な教育を受けられる仕組みづくりは大事である。県内企業において、どういった知識や技術が必要とされているのかを調査すべきではないか。それにより、各大学でどのような講座を提供できるのか検討可能となる。(廣田委員)
- ◇ 各企業に個別に聞くのは難しいと思うので、商工会議所等で把握することはできないだろうか。(佐藤部会長)
- ◇ 企業がリカレント・リスキリングのために従業員を送り出すために、何らかの支援がないと送り出せないという場合もあると思うので、そういった支援もセットで考えていく必要がある。(廣田委員)
- ◇ 秋田は、修士・博士の学生が少ない。大学で研究室を持つことにより、企業連携や社会貢献活動が可能となる。秋田は、大学自体は数があるので、博士課程の学生を育成する社会的仕組みがあると良い。(高橋委員)
- ◇ 国際教養大学は、専門職大学院しかないため、優秀な教員が、研究室を持たないことで、県外流出する恐れがある。優秀な人材にアピールするためにも、対応をお願いしたい。(高橋委員)

目指す姿6 生涯にわたり学び続けられる環境の構築

- 秋田県は47都道府県の中で、最も重要無形民俗文化財の多い県である。重要無形民俗文化財をはじめ、民俗行事は観光コンテンツとして認められているため、すぐに経済効果に結び付かない場合もあるが、そういった認識は必要である。(観光・交流部会:

豊田委員)

- ◇ 学校において、様々な世代や地域の人と一緒に学ぶことのできる環境づくりができればよい。「五城目町みんなの学校」の取組が参考になるのではないか。(廣田委員)
- ◇ 生涯にわたって学び続ける意味は、新しいことを知ることによって自分の人生が豊かになったり、何か新しい発見があって楽しくなったり、彩りが豊かになることを体感するところにあると思う。(高橋委員)
- ◇ 学びの場には、共通の関心テーマを持った方々が集まるので、自然と、新たな交流やコミュニティが出来上がり、アクティビティが生まれる。(高橋委員)
- ◇ 「五城目町みんなの学校」は、ネーミングセンスに加え、実施内容・方法についてもセンスが良い。どこの地域でも公開講座や市民講座を行っていると思うが、堅苦しさを感じたり、上級者向けであったり、曜日が限られていたりする。(佐藤部会長)
- ◇ 親しみやすさを付けていくことが大事であり、アートやデザインの力が強い。ぜひ美大の方々に参加してもらえるとありがたい。(高橋委員)
- ◇ 生涯学習という視点に立ったときに、自ら問題を発見し、考えるという学びが、豊かに生きていく意味では大事ではなかろうか。リカレント・リスキリングについても、最先端の内容の提供だけでなく、受講者の暮らしの中で興味・関心を抱くような内容に取り組めることがあってもよい。(佐藤部会長)
- ◇ 各地域で既に実施している取組を、五城目町の取組のようにアレンジして、県全体で取り組んでいけないだろうか。(佐藤部会長)
- ◇ 「五城目町みんなの学校」の姉妹校を募集している。県内外に波及効果があると良い。(高橋委員)
- ◇ 教える人が児童生徒であってもよい。高校数学の学び直しをしたいといったときに、教えるのは、高校教師ではなく、高校生でもよいと思う。(佐藤部会長)
- ◇ 県内でもっと文化的なものに触れる機会があってもよい。その点では、ミルハスを造ったのは効果的であったと思う。(廣田委員)
- ◇ 小学校の統廃合が進むことにより、伝統文化の継承が困難になってきている。(佐藤部会長)
- ◇ 伝統文化の継承が途絶えることは、もったいない。例えば、重要無形民俗文化財に自由に接することのできる日等を設定するのはどうか。(佐藤部会長)
- ◇ 秋田の伝統文化は全国的にも特徴的であり、海外の方にとって非常に興味深いものである。海外の方を通して、我々も自分たちの文化の良さが分かる面もある。YouTube等を活用し、海外に発信していくことも検討いただきたい。(佐藤部会長)